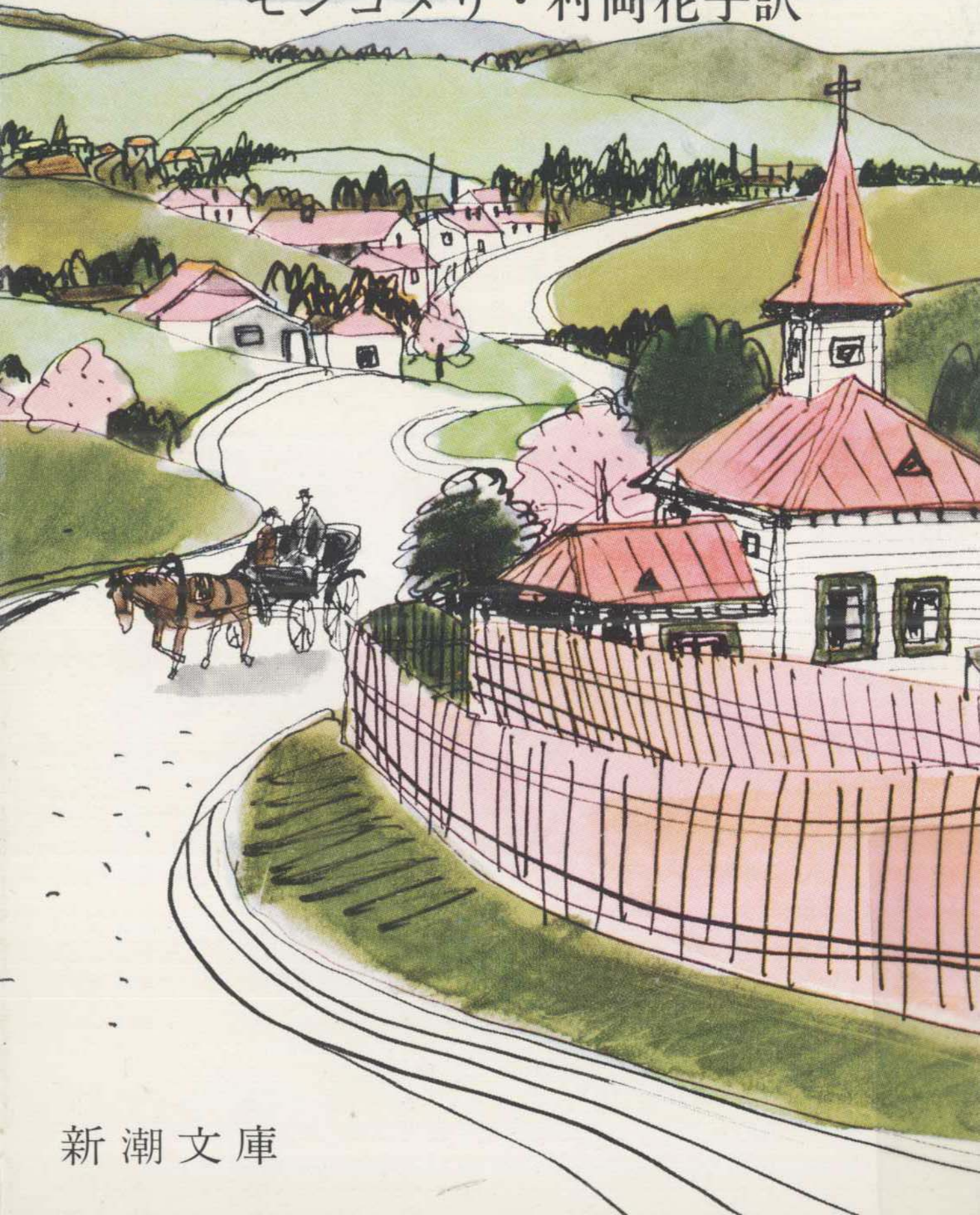


赤毛のアン

モンゴメリ・村岡花子訳



新潮文庫

Title : ANNE OF GREEN GABLES

Author : Lucy Maud Montgomery

あか げ
赤 毛 の ア ン

新潮文庫

モ - 4 - 1



昭和二十九年七月二十八日 発行
昭和六十二年二月十五日 七十五刷改版
平成元年六月二十日 八十五刷

訳 者 村 岡 花 子
むらおか はなこ

発行者 佐 藤 亮 一
さとう りょういち

発行所 株式 新 潮 社
会社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四四〇

振替 東京四―八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Midori Muraoka 1954 Printed in Japan

ISBN4-10-211301-0 C0197

新 潮 文 庫

赤 毛 の ア ン

モ ン ゴ メ リ

村 岡 花 子 訳



新 潮 社 版

657

赤毛のアン

第一章 レイチェル・リンド夫人の驚き^{おどろ}

アヴォンリー街道^{かいどう}をだらだらと下って行くと小さな窪地^{くぼち}に出る。レイチェル・リンド夫人はここに住んでいた。まわりには、榛^{はん}の木が茂^{しげ}り、ずっと奥^{おく}のほうのクスバート家の森から流れてくる小川がよこぎっていた。森の奥の上流のほうには思いがけない淵^{ふち}や、滝^{たき}などがあって、かなりの急流だそうだが、リンド家の窪地^{くぼち}に出るころには、流れの静かな小川となっていた。それというのも、レイチェル・リンド夫人の門口^{かどぐち}を通るときには、川の流れてさへも行儀作法^{ぎようさ}に気をつけないわけにはいかないからである。レイチェル夫人が窓ぎわにすわり、小川からこどもにいたるまで通行のもの全部にするどい監督^{かんとく}の目を光らせていて、ちよつとでも腑^ふにおちない点やふつごうなところを見つけたが最後、その理由を根ほり葉ほり、さぐりださずにはおかないということ、川の流れのほうでもわきまえていたのかもしれない。自分のことはそつちのけにして他人の世話ばかりやいている者は、アヴォンリーにかぎらずどこにもいくらでもいるが、レイチェル・リンド夫人は自分の始末はもちろんのこと、そのうえに、他人の世話までやくだけの腕前^{うでまえ}をもっていた。主婦としての手腕^{しゅわん}はたいしたもの、裁縫^{さいほう}の集い^{つど}の中心ではあるし、日曜学校の経営から外国伝道婦人後援会^{こくえんかい}の重鎮^{じゅうしん}といった

ぐあいでありながら、しかもなお何時間でも台所の窓下にすわって、木綿もめんのさしこのふとんをさす余力があった。「十六枚もつくつたんだとさ」とアヴォンリーの主婦たちは声をひそめて話しあうのだった。それもその間じゅう、この窪地からずっと向こうの赤い丘おかの急な斜面めんまでうねうねとつづいている街道のほうへたえず目をくばりながらの仕事だから驚きいたものである。アヴォンリーはセント・ローレンス湾わんにつきでた三角形の小さな半島を占めており、両側に水をひかえているので、ここからは出て行く者もはいつてくる者もかならずこの丘の道を越えなくてはならないので、しよせん、レイチェル夫人のぬけめのない監視かんしをのがれることはできなかった。

ある六月のはじめの午後のこと、レイチェル夫人はこうしてすわっていた。窓からは陽がさんさんとさしこみ、坂の下果樹園には、うすもも色の花が一面に咲きひろがり、無数の蜜蜂みつばちがぶんぶん飛びまわっていた。トマス・リンドは——おとなしい小がらな男で、アヴォンリーの人々から「レイチェル・リンドのご亭主」と呼ばれていたが、その男が納屋なやの向こうの丘の畑でおくての蕪かぶをまいていた。マッシュウ・クスバートは「緑の切妻グリーン・ゲイブルス」の向こうの、広い赤土の畑の蕪はまいてしまったらしかった。前の日の夕方、カーモディのウィリアム・ジェープレアの店でピーター・モリソンに向かって、明日の昼すぎにまくつもりだとマッシュウが話したのをレイチェル夫人はちゃんと聞いていたのだからまちがいはない。むろんその話もピーターのほうからたずねたからであって、マッシュウから何かきりだすなどということはない、これまでにただの一度もなかった。

それなのにこの忙しい日の午後の三時半という時間にマシユウ・クスバートはゆうゆうと窪地をぬけて丘を上って行くのである。そのうえに白いカラーと、取つときの外出着を着こんでいるところを見ると、どこかよそへ行くことは明らかだった。栗毛の牝馬めうまをつけた馬車を駆かっているからには、かなり遠方へ行くにちがいない。いったい、どこへ、何のために行くのだろう。

これがほかの男ならアヴォンリーのだれであろうとレイチエル夫人は、あれこれと巧みに考えあわせて、この疑問を二つともかなりうまく当ててしまうのだった。しかしマシユウときたらめつたに家をはなれないから、これは何か急な異変があつたにちがいない。マシユウのように内気な人間は知らない人をたずねたり、口をきかなくてはならないところへはいっさい、顔を出そうとしないのだから、こうして白いカラーをつけて馬車に乗って出かけるのはじつに珍しいことだった。いくら考えても何の推量もできあがらず、レイチエル夫人の午後は台なしになつてしまつた。

「お茶のあとで『緑の切妻』グリーン・ゲイブルスへひと走りして行つてマシユウがどこへ出かけたのか、そして何のために行つたのかマリラからききだしてこよう」とうとうレイチエル夫人は、さじをなげた。「ふつう、いま時分町へ行くことはないし、人をたずねるなんてことはけつしてしない人だし、もし蕪の種が足りなくて買い出しに行くのなら、あんなにめかしこんで馬車をひっぱって行くはずがないし、お医者様を迎えむかえに行くにしては急いでいるようすもなかったし。だが、ああして出かけて行くからには、昨夜以来、何か起こつたにちがいない。すつか

り、わけがわからなくなってしまうたよ、まったくのところ。なんできよう、マシユウがアヴォンリーから出かけて行くのかわかるまでは、いつときだってじつとしてられやしない」

そこでお茶がすむとレイチェル夫人は出かけた。道のりはたいしたことはなく、果樹園にかこまれた、だだっぴろいクスバート家はリンド家の窪地から街道づたいに行けば、半マイルのまた半分ぐらいの道のりだったが、長い小径こみちがあるのでかなり退屈たいくつだった。息子むすこにおとらず内気で無口なマシユウの父は、できるだけ人から遠のいた森の中へでもひっこみたいところを、その一步手前の地所に屋敷やしきをさだめた。その開墾地かいこんちのはずれに「緑の切妻グリーン・ゲイブルス」の家は建てられて今日におよんでいるので、アヴォンリーの家々が仲よくたちならんでいる街道からはほとんど見えなかった。レイチェル夫人からみると、そんな奥まったところにいたのでは、住むという意味をなさないのであった。

「ただ、そこにいるってだけのものさ、まったくのところ」車の轍わだちのあとが深くついている野ばらの小径を歩きながら彼女は言った。「こんなところに自分たちだけで暮くらしているのだもの、マシユウも、マリラも変わった兄妹きょうだいさね。木じゃあ話相手にやならないのに、木でよかったら、いやというほどあるけれどね。わたしなら人間のほうがいいな。とにかくあの人たちは満足しきってるんだよ。なれちまったせいさね。あのアイルランド人の言いぐさじやないが、慣れれば首をしめられることだって平気になるというからね」

こう、言いおわったときには小径は尽つきて、「緑の切妻グリーン・ゲイブルス」の裏庭へきていた。裏庭は青々として、きちんとかたづいていた。一方には大きな柳やなぎの古木が立ちならびもう一方の側には

威風堂々と言いたいロムバルディポプラが植わっていた。棒きれ一本石ころ一つ見あたらなかった。一つでもあつたらレイチェル夫人の目をのがれるはずはなかった。家の中を掃きだす度数とおなじくらい何回でも、マリラ・クスバートはこの裏庭を掃くにちがいないとレイチェル夫人はひそかに考えた。土の上に食事をひろげても、塵ひとつつけずに食べられるだろうと思われるほどの清潔さだった。

台所の戸を強くたたくと、おはいりと返事があつたので、レイチェル夫人は中へはいって行った。「緑の切妻」の家の台所は居心地よくつくつてはあつたが、あんまり清潔すぎるために、かえってふだん使っていない客間のようなよそよそしい感じがした。東と西に窓があるが、裏庭に面している西側の窓からは、なごやかな六月の日光が降りそそいでいた。青々した蔦がからみついた東の窓をのぞくと、左手の果樹園では白い桜の花がまっさかりだし、小川のほとりの窪地では、ほっそりした樺が頭をうなずかせているのが見えた。まぶしい日光をさけたがるマリラ・クスバートはすわるときにはいつもここときめていた。いまでも編物をしながらすわっており、うしろの食卓には夕食のしたくがしてあつた。

ドアをあけたとたんに、レイチェル夫人は、もう食卓の上のものを全部、心におさめてしまった。皿が三枚ある。するとマシユウがだれかを連れてお茶に帰ってくるのをマリラは待っているにちがいない。だが、料理はふだんのものだし、お菓子も野生りんごの砂糖づけだけしか出ていないところをみると、特別たいせつな客というわけでもないらしい。それにしではマシユウの白いカラーと栗毛の牝馬はどうしたわけだろう。静かな平凡きわまる「緑の

「切妻」の家にまつわるこのふしぎな謎はレイチェル夫人にはどうにも解けなかった。

「今晚は、レイチェル」マリラはてきぱきとあいさつした。「まったく気持ちのいい夕方じゃないの。おかけなさいよ。お宅じゃ、皆さんいかがですね？」

マリラ・クスバートとレイチェル夫人は気だてがちがっていたにもかかわらず、というよりも、ちがっていたからこそかもしれないが——二人の間には友情とでも呼ぶよりほかには適当な言葉のない、あるあたたかい感情が、いつでも交流していた。

マリラは背の高い、やせた女で、丸みのない角ばった体つきをしており、白髪の見えはじめた黒い髪をいつもうしろで、かたくひつつめにして、二本のかねのピンでぐさっととめていた。見るからに見聞のせまい、ゆとりのない心持を思わせたが、事実そのとおりであった。しかし、口のあたりに何か、もう少しどうかしたらユーモラスなものになる、と言えなくもない感じがただよっていた。

「おかげさまで、どうにか元気ですよ。だけでもしかすると、あんたがどうかしたんじゃないかって、ちよつと心配になったんですよ。きょうマシユウが出かけて行くのを見たものでね。お医者へでも行つたんじゃないかと思つたんですよ」

そらきた、と言わんばかりに、マリラの唇はおかしそうにゆがんだ。マシユウがあんなふうに原因不明の用むきで、出かけて行くのを見たら、レイチェル夫人は好奇心のかたまりのようになつてやってくるにちがいないと、マリラはさつきから待ちかまえていたのだった。「いいえ、きのうはひどい頭痛がただけで、わたしはどこもわるかありませんよ。マシユ

ウはね、ブライト・リバーへ行つたんですよ。ノヴァスコシヤの孤児院こじいんから小さな男の子を一人もらおうと思つてね。今夜の汽車でくることになってるんですよ」

もしマシユウがオーストラリアからのカンガル―を迎えにブライト・リバーへ行つたのだと、マリラが話したとしても、レイチェル夫人はこんなに驚きはしなかつたであらう。文字もじどおり五秒間というものは口がきけなかつた。まさかマリラが、からかつているとは思えないが、それでもそうと、とるよりほかはなかつた。

「あんた、本気で言つてるの、マリラ？」ようやく口がきけるようになると、レイチェル夫人はたずねた。

「もちろんですよ」と言つたマリラの口調ではノヴァスコシヤの孤児院から男の子をもらいうけることは、アヴォンリーの、きりまわしのよい農家の春の行事の一つであつて、なにも前代未聞みもんのことではないと、言いたててゐるようだった。

レイチェル夫人は非常に強いショックを受けた。男の子とはまあ！ 人もあらうにマリラとマシユウが男の子をひきとるとは！ 孤児院からだつて！ そうだ、たしかに世の中はひつくりかえつてしまったにちがいない。これが驚かずにいられるなら、ほかに何も驚くものはない。ありつこない！

「一体全体、どうしてそんなことを考えたものかね」とレイチェル夫人は承知しかねるようすだった。このことは彼女の意見をきかないで行われたので、したがってぜひとも不賛成の意を發表しなくてはならないのだ。

[illegible]

ド・スペンサーの衆にことづけして、年頃は十か十一ぐらいのりこうな男の子を連れてきてくださって奥さんに頼んだつてものですよ。それくらいになつてりやさしあたりすぐ何かと役にはたつしね、まだまだじゅうぶんしつけもきくし、しこめもするし、いちばんよからうということになつたわけだね。かわいがつてちゃんと教育もしてやるつもりですよ。きょうスペンサーの奥さんから電報がきて——郵便配達が駅から持ってきたのさ——今夜、五時半の汽車で連れてくると知らせてきたので、マシユウがブライト・リバー駅まで迎えに行つたというわけなのさね。もちろん、その子をおろしといて、スペンサーの奥さんはまっすぐ、ホワイト・サンドの駅に行つてしまいなさるんですよ——

レイチエル夫人は、自分の思ったことを、いつも率直に口に出すのをじまんにしていたので、この驚くべきニュースのショックからたちなおるがはやいか、とうとうと弁じだした。「いいかね、マリラ、はつきり言つとくがね、あんたはおつそろしくばかげたことをしてるんですよ——あぶないことをですよ、まったくのところ。どんなものをひきうけてくるか、わかつたもんじゃない。見もしらぬ子をわが家——わが家庭——の中へいれようとしてるんですよ。しかもその子について、何ひとつ知つてゐるわけじゃなし、性質がどんなか、素性がどんなか、その子がどんな人間になるのか、なんにもあんたにや、わかつてないじゃないの。そうそう、つい先週のこと、新聞で見たんだが、この島の西のほうで、ある夫婦者が孤児院から連れてきた男の子に、夜なかに火をつけられて——それもわざわざ、つけ火をしたんですよ、マリラ——もうすこしで、寝たまま丸焼きにされるところだつたんですよ、そ

れからもう一つ知ってますがね、ひきとった男の子というのが卵を吸ってしまいうけがあつて、どんなにしても、それをやめさせられなかったつてのもあるしね。もしあんたが、これについてわたしの意見をききなすつたのならさ——あんたはそうはしなかったけれどね、マリラ——わたしは後生ごしやうだからそんなことはやめてと言つただろうにね、まったくのところ」

この、慰めるなぐさのか、がっかりさせるのかわからない文句を聞いても、マリラは腹をたてるようすも不安がるけはいもさらになく、せつせと編物をつづけていた。

「たしかに、あんたの言うことにも一理あることはあるね、レイチェル。わたしもどんなものかと思わないじゃなかったけれど、なにしろマシユウがひどく、のり気になつてしまつてね、それがわたしにはわかりすぎるくらいわかつてたもんで、負けてしまつたんですよ。マシユウが何か夢中むちゆうでしたがるなんて、めつたにないからね、そんなときにはわたしのほうで折れるのが義務じゃないかといつも思うんですよ。危険といえば、この世で、人間のすることには何でもかんでも危険はついてまわるからね。そんなことを言つてた日にゃ、自分のこともだつて安心して生めなくなりますよ——かならずしも、どの子もうまくいくとはきまつていないからね。それにカナダのノヴァスコシヤといえはこの島のじきそばだしするから、英国とか合衆国あたりから連れてくるのとはわけがちがうしね。わたしらと、あんまり、ちがつたところもないと思いますよ」

「まあね、うまくいけばいいがと願つてはいますがね」と言うレイチェル夫人の口調は、明らかに悲観をものがたつていた。

「ただね、もしその子が『^{グリーン・ゲイブルス}緑の切妻』に火をつけたり、井戸^{いど}に毒薬のストリキニーネを投じたからって、わたしがあんに注意しなかったからってことだけは言わないでくださいよ——その井戸のことは、ニュー・ブランズウィックで孤児院のこどもがやったって聞いてますがね、それで一家全滅^{いっかぜんめつ}だったとき。もつとも、男の子じゃなくて女の子だったってことだけがね」

「それですよ、わたしらは女の子をもらうんじゃありませんからね」とマリラは言ったが、まるで井戸に毒を投げこむのは女の子の専門で、男の子にはそんな心配は少しもいらぬかのような口ぶりだった。「女の子を育てようとはわたしは夢^{ゆめ}にも思わないね。アレキサンダー・スペンサーの奥さんがどうしてそんなことをするのかふしぎですよ。でもあの人のことだから思いこんだら孤児院をまるごと、ひきとりかねないからね」

レイチェル夫人は、マッシュウがその孤児を連れて帰ってくるまで待っていたが、まだ二時間はたつぷりあることを考えたので、ロバート・ベルの家によってこのニュースを話してやることにきめた。きつと一大センセーションをまき起すにちがいない。レイチェル夫人はセンセーションを起こすのが、ひどく好きだった。そこで、いとまを告げて帰って行ったので、マリラはどうやら、ほっとした、というのはレイチェル夫人の悲観論^{えいきりろん}に影響されて、またもや疑念や心配がよみがえってきたからである。

「まったく何ともかんとも、まるで夢でも見ているようだよ」レイチェル夫人は小徑^{こみち}にはいつてしまうと、声をだして言った。「まあそのこどもというのがかわいそうだね。マッシュウ